

戦時色の青春

母校創立七〇周年を迎えられ誠に御同慶の至りです。心よりお祝い申し上げます。

さて、大正一五年の創立ですからちやうどその年に生れ、昭和の年号と共に歩み続けてこの七月で古稀になります。顧みると昭和一五年四月、憧れの中学校を夢みながら岩手中学（旧制）に入學しました。当時の日本は、

中村 一雄（旧15回生）

軍閥華やかかりし時代で、陸軍士官学校・海軍兵学校を目指して中学に入った者もありました。

もうすでに日中戦争は酷で、翌昭和一六年一二月には太平洋戦争へと拡大し、すべての国民は勝利を信じて頑張りました。従って学校も厳しいスパルタ教育で時には往復びんた

をくろう者、寒中に素足で雪上行進など、今なら大問題になることですが、当時は当然の事と耐えたのでした。また、口癖に困苦欠乏に耐えとよく言われました。これらの事が、戦中戦後の難関を乗り越える糧になったのでしよう。

そんな時代でしたので、教育課程は軍事教練に重点を置き、軍隊直属の教官が配属され、しごかれたものです。その教練の成果を評価される査閲なるものがあり、その日は軍隊より上級の将官が来校して査閲するのですが、学校の年中行事では大事なもので、この日の

ために連日猛訓練を受けたものでした。最後に分列行進を行うのですが、その先頭で校旗を持つ役に不運にも指名され試みましたが、小軀瘦身の小生では、よろけたり、ふらついたり、本当に体裁悪いやら情けないやらで、旗手を交替させられたエピソードがあります。

また、入学後まもなく恒例の行事として、五年生による説教なるものがあり、未だ乳臭さが残る一年生が講堂の板場に正座させられ、いかつい顔の上級生がぐるりを取り囲み、「お前ら弛んでるぞ」「石桜精神を叩きこんでやる」等々日頃の鬱憤を晴らさんばかりにがり立てるのでした。新入生達は足のしびれに耐えながら怖ごとく小さくなり、ただただ聞き流して時の経つのを待ったものでした。しかし現代の様な陰湿ないじめなどなく、況んや自殺などありませんでした。

また、当時は今の青山町一帯は岩手山麓につながる原野で、観武ヶ原（みたけがはら）と呼ばれ軍隊の練兵場と兵舎があり、春は山菜に秋は茸とりと大自然の宝庫でした。この原野で全校生徒による兎狩りもまた年中行事で、下級生が追い方を、上級生達がとび出した兎を捕えるといった案配、ところがあの俊足で逃げ回りせいぜい捕っても一〜二匹、それを無惨にも早速兎汁と化して生徒達の腹におさめるわけですが、勿論足りないので豚肉

持参、一同わいわいしながら兎汁（豚汁？）にありついたのでした。

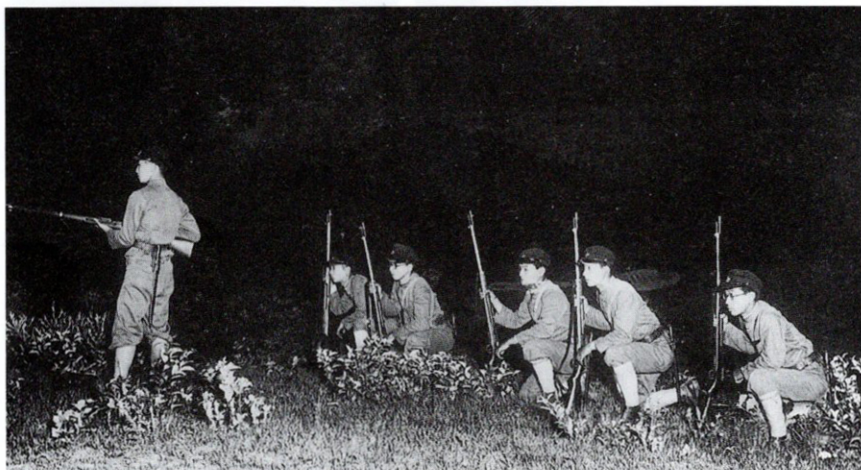
とにかく戦時体制の時代でしたから、柔道か剣道は必須科目でしたし、ラグビーもやらされました。ラグビーは、今は亡き戸嶋正夫先生（旧2回生）の時代に初めて岩手に導入され、岩中と岩手医専にラグビー部を創設されたと聞いております。しばらくはラグビー部の黄金時代が続きました。同級生の大沢靖君（元岩大教授）は活躍した方です。

かくして戦争が激化するにつれて、一般教養は等閑にされて勤労奉仕という名のもとに、田植・稲刈と農作業に時間を潰し、さらに五年生の秋には学徒動員で川崎市の軍需工場へと駆り出され、アメリカの空爆に晒されながら労働させられました。命辛がら全員無事に帰盛出来ました。

やがて敗戦、そして終戦となり、本当に戦争に明け暮した青春でした。でもその中で耐える精神を培い、戦後の虚無感を脱し得たものと思います。

お互いに老境に入りましたが皆、岩中時代が懐かしいに違いありません。母校は東北屈指の伝統ある私立高校で数多くの卒業生を出し、それぞれの分野で活躍しております。ただ近年、進学、運動部の活動が今いちの様で、同窓会長もこれを憂慮されて櫛をとばしてお

られます。私立高校の良さ、歴史のある岩手高校を再認識して、在校生諸君とともに母校を盛り上げていきたいと思っています。



暗夜の歩哨線
（昭和13年頃）